

高尾山 歴史の散歩道 45

明治大学博物館 外山 徹

別当薬王院 その1



江戸期の本堂(『八王子名勝志』
国立国会図書館所蔵・部分から)

大師堂から踵を返し、大本堂の前に戻る。御本社への石段を前に、いや、その前にいったん左手の階段を下りてみよう。その先にある、現在黒門と呼ばれる唐破風屋根の立派な門の先は、大本坊と呼ばれる寺域となっており、書院(一九四〇年建立)、方丈殿(一九五一年、

客殿(一九三四年)といった建物で構成されている。かつてはこの大本坊の一角が薬王院と呼ばれた寺域であった。

別当薬王院

徳川幕府の官撰地誌『新編武蔵風土記稿』(文政五年・一八二二)によると、

別当薬王院 境内東西五十町余。南北三十五町余。飯綱社ノ末ノ方ナル平地ニアリ。高尾山有喜寺ト号ス。京醍醐松橋無量寿院末。新義真言宗ナリ。

という。「飯綱社ノ末ノ方」という表現は、別当薬王院が飯綱社とは別にその南南西方向に所在する、という意味になる。今日では山上の伽藍全体が高尾山薬王院という寺院の寺域ということになる。往時は様子が異なっていたことがわかる。続く記載。

寺ノカマヘ平地四百坪余ニテ。本堂巳午向。九間二七間。本尊大日八木ノ坐像。

四〇〇坪は一、三三二平米になるが、この広さは黒門から奥、現在の書院方丈殿、客殿の建つ一帯となる。「境内東西五十町余。南北三十五町余」というのは、もっと広い範囲であるから、これは地所全体の範囲を指し、四〇〇坪というのが、「別

当薬王院」の建築群ということである。今よりはもっと狭い範囲が薬王院という寺院だったことになる。

『風土記稿』の記事構成をあらためて確かめると、冒頭の見出しには「高尾山」という呼称があり、「神社」として「飯綱権現社」が記され、鳥居、神楽堂に続き「末社」として小社が列記される。そして、別当薬王院があり、その裏門の記事の後に、仁王門や薬師堂、護摩堂といった仏教施設の記事が続く。それらは、別の記録では末寺の扱いともなっている証寂庵や蓮華院と併記されるので、別当薬王院を構成するということではなく、高尾山内に散在する堂宇群ということになる。

永禄三年(一五六〇)の北条氏康による寺領寄進状には薬師堂の修復料を寄進すると書かれ、その宛所が「薬師堂別当」となっている。そこには、薬師堂という堂とそれに

付随する立場であるところの「別当」という関係が見える。つまり、薬王院という名称は、薬師堂の寺僧に対する呼称として発したと解釈できるものである。住職のことを指して、「寺」「院」と呼ぶことがあるが、「別当薬王院」とは、そもそも僧侶に対する呼称から発し、その居住する堂宇群をも同時に指すようになったという道筋を想定できる。そして、薬王院は薬師堂以外の堂社群に飯綱権現社をはじめその末社や諸堂にとつての別当でもあった。

それでは、この今はそう呼ばれることもない「別当」とは、そもそもどういう意味か。別当という歴史用語を他に探すと、和田義盛という武士が鎌倉幕府の侍所の別当に就任したというのが知られている。すなわち、侍所の責任者として「長官」の意味である。つまり、「別当薬王院」と言うのは、寺院施設に対する呼

称というよりは、薬王院住職の肩書として高尾山の統治者を意味することになる。現在、薬王院住職と同じ意味で高尾山主という呼び方がされるが、それは全山の統治者という意味で、江戸時代以前からの伝統を踏まえた尊称とすることができると、宗教施設の別当という呼び方は、当時としてはボピュラーなものであった。村の鎮守社や小祠の類にあっても、たいしてその管理者として別当という僧侶が関与していたのである。

旧本堂

この神仏習合にまつわる問題は、宗教的聖地として高尾山を特色付ける一大要素であるが、ここではひとまず別当薬王院の寺域における建築物の変遷を見てみよう。近代に入ってからこの一帯の転変はめまぐるしい。黒杵の丸窓が優雅な現在の書院ができる以前、昭和四年(一九二九)

に大本坊一帯を焼失する大火があった。その際、焼失した書院は、小町和義氏によると、大本堂の建立と同じ明治三四年(一九〇一)に現在の書院と方丈殿の間に平屋建てで建てられたという。明治後期の絵図には黒門と同様の門が確認でき、その奥右手の崖下に「宝庫」「書院」と確認できる。この場所は明治一九年の裏山崖落によって倒壊した旧本堂の跡地である。旧本堂は小町氏によると寛政一〇年(一七九八)の建立で、『風土記稿』の記事には、

本堂巳午向。九間二七間。本尊大日八木ノ坐像。長二尺五寸許。左右二不動愛染ヲ安ス。ソノ右ノ間八護摩修法所ナリ。本尊不動。木ノ立像ニテ二尺八カリ。又別二同ク坐像ノ不動ヲ安セリ。長一尺七寸許。

とある。現在の大本堂は両翼に張り出した増築部分を除いたのが建立当初

の規模だが、間口はそれよりも二間(約三・六メートル)広く、山内最大の仏堂であった。

書院

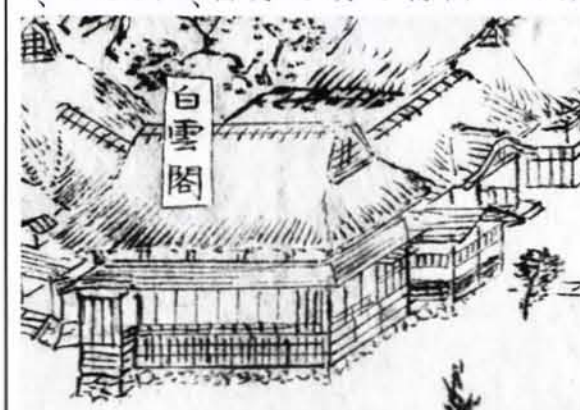
『高尾山誌』(昭和二年・一九二七年)は書院について「白木の合天井狩野元信の描いた壁画美しく。「白雲閣」と呼んで、高尾十勝の一に数へられ」と記す。しかし、狩野元信は戦国期の絵師であり、全く時代が合わない。恐らく狩野派の筆法からそのような言説が伝わったのだろう。

それにしても、それなりに古色を帯びていたとすれば、三〇年も経たない建築のこととも思われにくい。また、「白雲閣」とは『風土記稿』などにも言及される江戸期の書院のことである。したがって、この記事は前出の明治三四年の書院とは違う建物のことを述べているのかもしれない。ともかく、『風土記稿』の記事を見てみよう。

書院 十間二三間。白雲閣ト号ス。此所八山ノ崖端ニテ頗ル眺望ヨシ。大木ノ梢ヲ眼下ニ見オロシテイト奇観ナリ。

小町氏によると、江戸後期の書院は安永年間(一七七二〜八一)に庫裏・僧坊とともに建立されている。では、この風光明媚な建物は、一体、どこにあったのだろうか? 『八王子名勝志』(弘化四年・一八四七以後)の記事には「玄関書院」という表現がされており、その建築は挿絵で確認できる。その後、明治初期の絵図にも同様の建物の存在が確認できるが、先の明治後期の絵図では黒門に近い方から「宝庫」「書院」と横に並び、書院の手前の玄関がある建物を「客殿」として

いる。すなわち、



江戸期の書院(『八王子名勝志』
国立国会図書館所蔵・部分から)

江戸期には現在の客殿の位置に白雲閣と呼ばれる書院があったことになる。昭和の初期までは振り仰ぐことのできた白雲閣だったが、惜しくも同四年の大火で焼失することになる。

おことわり 史料の引用については、読みやすい原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。《参考文献》
小町和義「高尾山の建築について」(『多摩文化第二四号武州高尾山その自然と歴史』一九七四)